いだてん
韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ⑥1

「簡単だ」と演劇へ

わたしの人生は人に恵まれた人生であるといっていい。ここぞという時に救いの神のような人が現れる。「映画監督は諦めろ」と岡本喜八監督からいわれた日から、わたしはなんとなく荒れた生活をしていた。仲間の「人生は、どうせ死ぬまでの暇潰し」といった言葉に同調したりした。大学も行ったり行かなかったりであった。学園紛争も激しくなっていた。故郷とも音信不通であった。後に知ったことであるが、父はテレビであさま山荘事件を知り、犯人の中にわたしの顔を捜していたそうである。わたしは学園紛争をするタイプではないことは父は承知していたはずである。

そのころ知り合ったガールフレンドが、わたしのあまりの荒み方に「そんなに荒れてばかりいないで、演劇でも見ればいいじゃない」といって、六本木の俳優座劇場のチケットをくれた。俳優座公演の「髭の生えた制服」である。主役は東野英治郎であった。この人は黒澤明の作品や「キューポラのある街」で知っていた。これが新劇を知るきっかけとなったのである。舞台を見ながら「これは簡単だ」と考えた。

映画のロケは二、三百人のエキストラは平気で動かす。撮影に夢中になっている岡本喜八監督は昼食の時間になっても休憩をしなかった。たまりかねた助監督が「監督、昼飯の時間です」というと「えっ、俺まだ腹減ってないよ」といって撮影を続行した。まったく、監督とは貪欲なものである。

舞台は10人か15人の俳優だけである。セットも簡素化されている。素人が「これは簡単だ」と考えるのもむべなるかな。演劇の奥の深さを知るのは後年である。「そうか、演劇という手もあるな」。その年に3畳間の下宿で書いたのが「トンテントン」である。20歳であった。

「テアトロを読んだら」。わたしが演劇に興味を持っているのを知った舞台好きの友人が薦めてくれたのが、演劇総合雑誌「テアトロ」である。その広告で劇団三十人会が養成所の第1期生を募集していた。これが演劇を始めるきっかけであった。「激動」といわれた時代である。小劇場が次々に誕生した。騒乱罪という物騒な言葉を知った。25歳で劇団を結成した。それが劇団「空間演技」である。この劇団は今日まで継続している。

（松浦市出身）